

炎の  
上  
の  
炎  
の  
炎

炎

炎

## 始まりのアカウント

---

普通の高校生、秋野良子はパソコンや携帯で一言つぶやけるツイッターを始めて三ヶ月。ようやくフォロワーも増えてきてつぶやくのが楽しくなってきた良子は大した出来事もないのになうなうなう言っている。

片時も風呂に入る時ですら携帯（完全防水）を手放さない。中学生の妹の理乃はそんな姉をうるんげな目で見ている。理乃もツイッターやボイスでつぶやくことはつぶやいていたが、姉ほど熱心ではなく、精々一日に二、三つぶやくかつぶやかないかくらいのものであった。

理乃は良子のアカウントを知っているし、良子も理乃のアカウントを知っている。しかし、相互にフォローはしていない。なんだか気恥かしいからである。アカウントは知られているのだから、結局見ようと思えば見られるのだが。父も母もツイッターの存在は知っているが、娘たちが、特に良子がそんなに熱心に日々の出来事をつぶやいていることには気が付いていない。両親は良子が熱心に友達とメールをしているくらいに思っていた。

そんなある日、良子が一日につぶやいたつぶやきの数は、百を超えた。

理乃が見ているだけでも、良子は家に帰ってからはずっと携帯とにらめっこしているし、食事中も母から見えないように左手で携帯をいじっている。携帯を手に入れた当初、良子は食事中も携帯を手放さずついに母がキレた。母と良子の間には四半世紀近くの年代の差がある。母の少女時代には携帯は当然無かった。怒るのも無理はない。

「ご飯食べるときくらい、携帯は触らない！」

それ以来良子は食卓の隣に座りながらも気づかれぬように気をつけている。しかし、気をつけているからといって気付かれぬわけがない。何回か危ない橋を渡った。それも妹の協力があって渡ることができた。

妹の理乃は母がまたキレるのを見たくなかった。だから、危うく気づきそうになったときには母に話しかけるようにした。良子からは感謝されたがこのままでは良くないと思った。さすがにずーっと携帯とにらめっこしているのはやばいんじゃないのお姉ちゃんと理乃は思ったが、姉が自分の言うことを聞くとは思えなかった。

母に言おうかと思ったが、そうすると姉のプライバシーを侵害することになる。ついでに自分のアカウントも母に見られてしまうだろう。自分が母に姉のアカウントを告げた報復として姉が母に言うだろう。それは困る。理乃はたいしたことをつぶやいているわけではなかった。それでもやはり親には知られたくない、見られたくないこともある。そこで理乃はやめさせるとはいかなくとも、良子のつぶやきを減らそうと考えた。姉の為と思ってある方法を考えた。

それが、あれほど大きなことになるなんてこのときの理乃は想像だにしていなかった。

## 始まりのアカウント（口座）

---

翌日、良子は学校から家に帰ると財布と印鑑、保険証と学生証を持って銀行へ出かけた。とりあえず何を持っていけばよいかわからなかったのが調べるよりも先に要りそうなものを全部かばんに突っ込んできたのである。アルバイトの給料が手渡しから振り込みに変わるので、新しく口座を作る必要があった。もちろん待ち時間にも「銀行なう」「口座作るなう」などつぶやいていた。口座を作るのに必要なものはそろっており、空いていたので三〇分も経たず手続きは終わった。通帳ができるのに一週間ほどかかると説明を受けて岐路についた。良子は帰りにコンビニに寄ってアイスを買ったことにした。

その夜、理乃は家族が寝静まってからパソコンを起動した。携帯のメルアドからフリーのメルアドを手に入れた。ひとつ元となるメルアドがあればいくらでも無料のメールアドレスを得ることができる。そこから彼女はツイッターのアカウントをもう一つ手に入れた。とても簡単に副アカウントが作成できた。

次に検索エンジンから「りょこりょん」と検索する。なんて馬鹿っぽいニックネームだろうと最初に聞いたとき思ったが、言ったら殺されるから黙っていた。まあ、自分のニックネームも人の馬鹿に出来ないものであると理乃は自覚していた。ちなみに理乃の主アカウントは「りのりー（ririnoko）」である。

最初、始めるときは良子がこれほどのめり込むなんて思っていなかった。メールで十分と姉は自分でも言っていたのだ。そんな姉にやってみればと言ったのは理乃だ。だから、私が止めなければならぬ。少なくとも十%くらいは理乃にも責任がある。

それはエンターキーを押してすぐに見つけることができた。

一番上に「りょこりょん（ryokoryoku）」と姉のアカウントが表示された。そして次の瞬間、更新された。理乃はすぐさま背後を警戒する。良子はまだ起きている。おそらくは自分の部屋で携帯から更新しているのだろうが、油断は禁物だ。

パソコンのキーボードをかちゃかちゃする音にさえ最大限に気を配りながら、先程作った副アカウントで「りょこりょん」をフォローする。そして、忘れずにログアウトし履歴を消去、パソコンの電源を落とす。今日の作業はこれまでだ。明日も早いから寝よう。理乃はきしむ階段をそろりそろりと昇りながら、あくびを噛み殺した。

同時刻、良子は「おやあり」（おやすみありがとう）をつぶやいて、眠ることにした。一階からなにやら物音が聞こえた気がしたが猫の音だろうと思って気にしなかった。目をつぶって三秒で眠りに落ちた。

翌朝、午前七時四十分。何事もなかったかのように理乃は朝食を食べていた。父はとっくの昔に仕事に出ていたし、母も理乃が起きたころにパートに出かけて行った。理乃が半分くらい食べ終えたころだろうか、良子がのろのろと起きてきた。

パジャマで携帯片手に眠そうに起きてきた。理乃はいつも通り、良子の分のコーヒーを淹れて、パンを渡した。三分で平らげた。早いなあと姉を眺めながら、理乃はゆっくりと朝食を食べる。理乃もまだパジャマだったが、良子のように慌てることはない。歩いて十分もかからない中学校に通っているからだ。

対する良子は慌てなければならない。自転車でぎりぎり通える距離の高校にバスを使っているからだ。最初は自転車でがんばっていたが、冬は手袋をしていて手が凍りつくし、夏は学校に着くまでに日焼け止めが流れ落ちるほどの汗をかくので、二年の春からバスに変えたのだった。

バスのデッドラインは八時五分発。家からバス停までは歩いて五分。走れば三分。そして今は朝食を食べ終えて七時四五分。洗顔、朝シャン、化粧、着替えを一五分に詰め込んで良子は家を飛び出した。残った理乃は戸締りをして、ゆっくりと家を出る。

良子とその新しく自分をフォローしたアカウントに気がついたのは学校に着いて一限目の世界史の授業中だった。朝一番の授業とあって、半分くらいの生徒は眠っている。良子は携帯を半分机の中に入れてつぶやきをチェックする。一通りフォロワーのつぶやきを眺めて、ひとこと「世界史なうねむいなうみんな寝てるなう」とつぶやいた。それから見つけた新規アカウントを「りょこりょん」がフォローする。日に日にフォロワーが増えてうれしいなと良子は呑気に喜んでいた。

朝起きてから、時間がないにも関わらず「おはよう」「おはあり」はすでに済ませていた。校門に着いた時には「学校なう」と飽きもせず毎日画面の向こうに報告していた。良子は割と器用な方だったので、先生にばれることはなかった。

良子の携帯は自転車からバスに交通手段を変えるのと同時に、つまり二年の春からガラケーからスマホに変えた。ガラケーはガラクタ携帯ではなくガラパゴス携帯のことで日本製だった。スマホとはスマートフォンで良子が使っているのは割とさくさく動くものだった。

良子がフォローを返してきたのを理乃はお昼休みに知った。姉のつぶやきを読むのが目的ではないので読む気などなかったが、瞬く間に更新されるので目に入った。「お昼ごはん喰う」「パン争奪戦に出遅れたー(>\_<)」「おにぎりなううっ」パンは買えなかったらしい。つぶやくまえに走れば良いのにと理乃は遠い目をした。

## 偽りのフォロー（ついていく）

---

二限目は体育でこればかりはさすがの良子も携帯を持っていくわけにはいかなかった。授業中に携帯を触ろうものなら、連帯責任でどんな罰が待っているのかわからない。良子ではないが他の女子がだらだらと話しながら遅刻した時は、クラス全員が学校の周りを二週走らされた。体育教師は高齢で古臭い観念を持っていたのだから、仕方がないと言えば仕方がないのだがいまどき連帯責任とは。

今日の体育は体育館でバレーだった。良子は運動神経が悪い方ではなかったのに体を動かすことは好きだったが、球技は苦手だった。案の定、試合の中盤でボールの軌道が見えていたにも関わらず良子の顔面にボールが吸い込まれていった。鼻血が出た。

「ごめえん！ 大丈夫？」

謝りながら笑っている。友達の愛梨が投げたボールだったらしい。良子は鼻を押さえながら大丈夫！ というジェスチャーをした。しかし、鼻血はだらだらと手の隙間を零れ落ちていった。それを見て愛梨は、やばいという表情をして良子に駆け寄って保健室へ連れて行くとともにみんなに伝えた。

ついてきた愛梨としゃべりながら、良子は真上を眺めていた。体育館から渡り廊下を歩き、グラウンド側の校舎に入った。先生はいないので適当に鼻を拭き、鼻血はとまったが残り二〇分もなかったのでそのまま授業が終わるまで休憩することにした。ほんの一瞬、教室に携帯をとりに行くかどうか迷ったが、クーラーのきいた保健室から出るのはなんだかもったいない気がした。

「ごめんねー。痛かった？」

「大丈夫大丈夫。ほんとはメガネかけた方が良いんだけど。最近視力落ちてきて」

愛梨が悲しそうにたずねてきたので明るく良子は振る舞った。

「でも、なんかメガネって邪魔なの。夏は暑いし冬は重いし。角膜にとってはレーシックよりもコンタクトよりも良い存在だってわかってるんだけど」

ちらりと愛梨をみる。愛梨は眼鏡をかけていた。

「まあ、慣れだね。私はすごい近眼だし、小学生の時からかけてるから。ていうか、りょうちゃんが最近視力落ちてきたのってやっぱり、携帯の眺め過ぎなんじゃないの」

「う……。それは否定できない。つぶやき楽しいんだもん」

「だって、私フォローしてる人少ないから、たまに見るとりょうちゃんのツイートで埋まってるんだよ」

「それは、なんだか申し訳ない」

「おもしろいから良いけど。あ、今日のお昼、私何も持ってこなかったから購買に行きたいんだけど、いい？」

「ほんと？ 丁度いいや。私も今日、朝買う時間全っ然なかったから買いに行かなきゃ」

お昼の約束をしたところで二限終わりのチャイムが鳴って二人は教室に戻ることにした。

理乃は放課後、美術部の部室で携帯を眺めていた。顧問の先生はやる気がなかったし、部長もななあという感じでとってもゆるい雰囲気部の部活だった。机にべたりとへばりついて理乃はぼんやりと正アカウントの「りのりー」のタイムラインを眺めた。一時間前、三〇分前、一〇分前、五分前いくつものつぶやきがそこにあった。けれど「りのりー」のつぶやきはそこになかった。と、そこへ水彩画用の水を汲んで来た部長が話しかけてきた。

「りのちゃん、絵一描かないの？」

「はい。今日は描けなさそうです」

「そうかー。そうだよ。あつついもんね」

「暑いですね」

「でも、部室に来てくれてありがとう」

「いえいえ」

この学校では美術部は幽霊部員が多かった。おそらく一番多いのではないか。その理由は年に一度、文化祭に出品する作品さえ描いていれば何も文句は言われなかったことにある。四月にやる気っぱいのときに描いた絵をそのまま使い、後は翌年の四月まで絵を描かないという部員さえいた。しかし、そんな部員に限って部室にはときどき顔を出し、部の皆で遊びに行く企画などを考えるのだから、世の中はうまく回っているのかもしれない。理乃は週二、三日、顔を出してたまに絵を描いて帰る部員だった。

今日は理乃と部長のほかに数人の部員が来ており、珍しくみんな絵を描いていたので考え事するにはもってこいだ。理乃とわりと仲の良い静香は塾の説明会に行くと言っていた。理乃は考える。

副アカウントを作成し、「りょこりょん」をフォローするまでは順調に行った理乃だったが、考えた方法に少し躊躇う気持ちがあった。こんなことをして本当に良いのだろうかという気持ちがあった。けれど、やはり理乃がやらなくてはならない。ツイッターを紹介したのは自分だ。

お昼休み、おにぎりをほおぼりながら良子は愛梨に言った。

「ふあたしとしたことがぜんぜんきづかあかった」

「飲み込んでから話してよ」

「新しくフォローした人がいたのに全然気付かなかったの。みてよ、これ記念すべき三百人目！

プロフィール見たらとても話が合いそうだし。すぐフォロー返したよ」

「はいはい。おめでとう」

「すっごいどーでも良さそうだね、愛梨」

「りょうちゃん三百人もいちいちプロフィールとか見てるの？ 覚えられないでしょ」

「見てるけど、覚える必要なんてないじゃん。また見ればよし。愛梨は覚えてるの？」

「できれば覚えたいと思ってるよ。無理かもしれないけど」

「いや、愛梨ならできそうな気がする。頭いいし、できる」

そうかなあと愛梨は照れて微笑んだ。愛梨の機嫌を直すのは朝飯前だった。良子はひとつ気になっていたことを訊いてみた。

「でも、この人何にもまだつぶやいてないの。アカウント作ったばっかだったら、はやくいっばいつつぶやいてみたかって思わない？」

「まだ、仕組みがよくわかってないんじゃない。だから、この人もきっとそうなんだよ」

## 躊躇いのフォロワー（追跡者）

良子は放課後、演劇部で文化祭の脚本の筋書きを読んでいた。脚本係の部員が書いた脚本をみんな読んで台詞や動きなどを面白くなるように変える作業の前の下読みだった。良子は部活が大好きだったので大抵、終業の鐘が鳴ると走って鍵をとりに行き皆が揃うのを待っていた。普段は腹筋をしながら待つ熱血部員だった。まだ誰も来ない部室で良子は脚本のあらすじを眺めた。

『タイムマシンで過去に戻った男が、男の居た時代よりもずーっと未来の時代から来た警察のような組織から追跡されるという話だった。手に汗握る感じで捕まりそうで捕まらない。けれど、結局タイムマシンを使って先回りをされて捕まってしまうが、捕まえた警察は泣き落としに弱いタイプで男の話をつい聞いてしまう。話を聞くとさらに断ることなどできなくて警察は協力することになる。すると、それを感知したさらに未来の未来から新たな追跡者がやってくる』

わりとおもしろそうだった。ただこれを演劇で表現するのは難しいかもしれない。見ていると頭がこんがらがらないか。そんな懸念もあったけれど良子はとてもわくわくしながら、本編を読み始めた。

良子がざっと読み終わるころに部員が揃って、出席をとった。三十人の名前が呼ばれて準備体操、発声練習、腹筋背筋、ランニング。それから脚本の話し合いが始まった。

理乃は夕焼けが照らす坂道を上っていた。自分の影が長く伸びて理乃の前を歩いている。学校から家まではずっと上り坂だった。ちりりりーん。という自転車のベルが鳴って、理乃は振り返らずに道の端に避けた。にもかかわらず、自転車は理乃に追突した。

「「いたっ」」

首をねじり確認する。自転車の前輪が中学指定のもさもさ鞆にのめり込んでいる。視線を上げると、姉がいた。自転車に乗っていたのは良子だった。

「あ、ごめん。ぶつかるとは。私このままバイトに行くから、お母さんにごはんいらんって言うっついで。おねがい」

人を自転車で轢きながらおねがいするなんて良い御身分だ。理乃はそう思ったが仕方なくうなずいておいた。家に帰りそのことを伝えると母は「今日は良子ちゃんと理乃ちゃんの好きなハンバーグ作ったのに。二時間くらいかけて作ったんだよ」と嘆いたが、「良く考えるとひとり分を三人で分けれるから食べれる分が増えるわ」と喜んだ。

ハンバーグをお腹いっぱい食べ終えて理乃はソファでごろんと横になった。食べてすぐ眠ると牛になるぞと父に脅されるのだが、すでに牛みたいな体系の人に言われてもなんだかなあという感じである。九時頃になり仕事を終えて帰って来た父とバイト上がりの姉にソファを譲ることにした。理乃は風呂に入り時間割を合わせた。宿題は夕食前に済ませてあった。

理乃はもさもさの中学校のかばんから、携帯をとりだしてホームボタンを押した。

## 脅迫のツイート

---

階段を昇ってすぐ右にあるのが理乃の部屋であり、左にあるのが良子の部屋だった。夏は暑いので扉も窓も開けっ放しにしている。理乃が部屋に戻った時、良子は部活とバイトに疲れてすでに眠っていた。

理乃が副アカウントとして適当に作ったのは「のりの」(lackingKIA)という架空の女子高生プロフィールを載せたアカウントである。

『趣味は音楽で今流行りの音楽も聞きますが、私が好きなのは「柴犬とチワワ」というバンドです。あと、演技に興味があります。』

たぶん、これなら誰にも迷惑はかけないはずだ。かけないはずだった。あれほど大事になるなど理乃は夢にも思っていなかった。

放課後に踏ん切りはつかなかった。だから最初は関係ないことをつぶやいてみようと思った。今回のアイデアとは別に「のりの」の趣味に関することを三ツイートつぶやくことができた。

【lackingKIA のりの

はじめまして。ツイッター初心者です。大好きな音楽や演技について話したいなって思っています】

こんなもんかな。でも、高校生ってどんなだろう。あと二年ばかりしたら理乃も高校生になる。しかし、姉の良子の姿を見ているあまり参考にはならない。

【lackingKIA のりの

えっと。プロフィールにも書いたんですけど、私「柴犬とチワワ」というバンドが大好きなんです。私がつくに好きなのは「ビーフジャーキーと酒」です】

この曲は「柴犬とチワワ」を良く知らない理乃も歌えるほどだ。キャッチーなメロディに楽しい意味不明な歌詞がのっていて誰でもすぐに覚えてしまう。

【lackingKIA のりの

もうちょっと自己紹介をしたいけど、今日はもう遅いので眠ります。おやすみなさい】

時間は午前二時を回っていた。今度こそ理乃は覚悟を決めた。

少し脅せば、単純な姉の事だ。ツイッターから少しは離れるだろう。

「えい」

理乃はひとことつぶやいてログアウトした。

「ビーフジャーキーと酒」

世界が逆さまに見えたのは　ボクが仰向けに転がったから

ビーフジャーキーを食べたら　のどに詰まった

慌てて主人が飲み物を探した　見つからなかった

主人は自販機に走った　全部売り切れだった

いや、ビールだけが残ってた　ビールを持って戻って来た

ボクは初めて酒を飲んだ　逆さまだった世界が回り始めた

言葉がわかるようになったのは 主人が毎日話しかけてくれたから  
ドッグフードを食べたら のどに詰まった  
慌ててボクは水を飲んだ 流れていった  
主人は笑っていた ボクは嬉しかった  
いや、笑うなんてひどいとも思ってた それでも大好きだった  
ボクは初めて話しかけた 主人が仰向けに転がり始めた

## 脅迫のツイート（さえずり）

---

【lackingKIA

次の標的は、お前だ】

5hours ago

あくる朝、目覚まし時計が鳴る前に鳥のさえずりで良子は目が覚めた。顔を洗うより、着替えるよりも先に携帯を見たらそんなメッセージが「りょこりょん」のもとに届いていた。ダイレクトメッセージは昨夜、良子が眠った後に送信されたものだった。単純な良子はまず蒼くなった。

標的？ 私が？ 一体何の？

わけがわからなかった。しかも、その送り主は「のりの」だ。「のりの」のつぶやきが「次の標的は、お前だ」

なにかまずいことでも言ってしまったのか。わからない。そもそも、昨日知り合ったばかりのフォロワーだ。考えれば考えるほどわからない。とりあえず、本人に尋ねるのが一番だろう。良子は「のりの」にリプライを送ることにした。

結果的に言うところではまずかった。良子の口調はいつも通り軽い感じだったからだ。しかし、これまで良子はトラブルに巻き込まれたこともなかったし、気が動転していた良子に正しい対応を求めるのは酷だろう。仕方がなかった。

【ryokoryoku @ lackingKIA

どどどどいことでしょうか？ 何か気に障ることを言ったでしょうか】

返事を待つのもどこか恐ろしい気がしたので良子は起きてご飯を食べた。母に早起きするなんて珍しいわねと言われた。でも良子は上の空だったからろくに返事もしなかったし、理乃がじいっと良子を見ていることにも全然気がつかなかった。

学校に行っても良子は落ちつかなかった。授業中もまったく授業に集中できなくてついやってしまった。普段は最大限に気をつけているのに、教師に携帯を使っているところを見つかってしまった。

黒板に板書をしていた教師が不意に振り返ったのだ。

「ごるあ！ 秋野！」

やば。

隠すには三秒遅かった。しかも運の悪いことに見つけたら必ず没収する数学教師だった。放課後まで返してもらえないだろう。良子はとても悲しくなった。表情もそれに連動して顔面は蒼白になった。教師は良子が反省しているのだと思ったが、例外は認めなかった。

「放課後、職員室までとりに来なさい」

「はい。ごめんなさい」

素直に謝っておくのが一番だ。良子はこれまでにいろいろと失敗してきたからそれだけはわかっていて、それにしても「のりの」からの返信は来るだろうか。良子はそればかりが気になって

いた。

昼休みに理乃は「りょこりょん」のタイムラインを眺めていた。朝リプライが飛んできていたがまだ返事はしていなかった。それ以外に「りょこりょん」の発言が無くなったのはやはり少しびびっているからだろうか。このまま順調にツイートは減ってくれるだろうか。さて、どう返事をするべきか。

「ごはん食べないの？ りのちゃん」

「あ。うん。食べよー」

静香に現実に引き戻される。ポケットに携帯を突っ込んで理乃は昼食を食べ始めた。

## 導火のリプライ

---

【runranron @ryokoryoku

りよこさん。どうしました。だいじょぶでつか】

【tunamakiai @ryokoryoku

生きてます？ いつもつぶやきまくってるのに】

放課後、良子が数学の職員室に叱られに行き、携帯を取り戻してみるといくつかのメッセージが入っていた。良子は慌てて、大丈夫であることただ携帯を没収されていただけということをつぶやいた。

依然、「のりの」からの返信はなかった。良子の眉はハの字に曲がった。けれど、楽観的なところが取り柄の良子である。何かの間違いかもしれない。もしかしたら、ドラマとかの台詞かも。演技好きだって言ってたし。

演劇部に向かう途中、家庭科部から良子を探しに来た愛梨がクッキーを持ってきてくれた。

「演劇部の皆で食べてね」

「ラッキー！ ありがとお」

単純な良子は、とても喜んで走って部活へ向かった。走りながらもつぶやいた。

【ryokoryoku

クッキーもらったなう。食べながら走る】

美術部の部室で理乃は絵を描いていた。昨日はただ時間を潰していたが、もともと理乃は絵を描くことが好きだった。頭の中にある風景をそのままキャンバスに写していく。美術の教科書に載っていそうな田園風景が描かれていた。というか実際、載っていた。

「おっ。りのちゃん。模写？ 上手いねー」

「ありがとうございます。見ないで写してみようかと」

心ゆくまでびっしり細部に描き込みをして理乃の下書きは完成した。それから教科書に載っている絵と見比べて、半分くらいは写せたかなと評価した。

家に帰りながら「りよこりよん」にどう返事するかを考えた。率直につぶやく回数を減らせとすべきか。しかし、それだとリアルに良子を知っていることがばれてしまう。だから、この返事は使えない。ではどうすべきか。理乃はりよこりよんのタイムラインを見た。昼休みに確認したときはほとんど黙っていたのに、放課後午後四時頃から狂ったようにつぶやきが並んでいた。どうやら携帯は没収されていたらしい。びびっていたわけではなかった。

「効果なし」

理乃は口に出してつぶやいた。もう少し、脅さないといけならしい。

今度はダイレクトメッセージではなく、普通のリプライを使って「りよこりよん」に送ってみることにした。その文章をみた他の人が良子に注意をしてくれることを期待した。

しかし、これが問題になった。

「lackingKIA

次の標的は、お前だ」

理乃は玄関の扉を開ける前に、投稿ボタンを押そうとした。

## 導火のリプライ（反撃）

---

しかし、突然、玄関が開いた。理乃と同じように携帯を片手に持った良子がいた。理乃はびくうっとして携帯を取り落としそうになった。慌ててポケットにしまう。

「おかえり。どうしたの」

「ただいま。何でもない。それよりお姉ちゃん、そんなにずっと携帯眺めてて良いの。勉強とか、宿題とか」

「そんな私の勝手でしょ。私はちゃんと携帯代も自分で払ってるのよ。リーちゃんに言われたくない。働いてない人に言われたくない。自分で払ってない人に言われたくない」

そう言うなり良子はバイトへ出かけて行った。ボタンと扉が閉じた。やはり理乃が言っても駄目なのだ。無駄なのだ。理乃はローファーを脱ぎ捨てて、母にただいまと言うと自分の部屋に籠った。泣いてなどいない。少し哀しくなって怒りが湧いた。それだけだ。

携帯を取り出してホームボタンを押す。編集中の画面が現れる。感情的になって一言余計なことをつけ足した。

【lackingKIA

次の標的は、お前だ。56す】

かばんから宿題を取り出して、ものすごいスピードで理乃は計算と漢字の勉強をした。いらいらしたときには勉強をするのが一番だ。いらいらしたら物にあたる良子とは対照的な理乃だった。

夕食作りを手伝い、母と食べて理乃は風呂に入る。お笑い番組を少し見て、そう言えばつぶやいてからほとんど携帯を見ていなかったことに気がついた。もうすぐ姉も帰ってきそうな時間だったので理乃は母に「おやすみ」と言って部屋に戻った。

そして。

携帯にメールが来ていないかを確認してから、「りのりー」のアカウントを確認、最後に「のりの」のアカウントを確認する。

「ん？」

そこには理乃の知らない人からのメッセージがざっと三十通ほど届いていた。そのほとんどが「lackingKIA のりの」を非難する声だった。

ネット上の知らない誰かがこんなにたくさんいるなんて思いもよらなかった。いや、知っているのは知っていた。ただ自分がその渦中にいるなんてとても想像がつかなかった。

怖い。

でも、戦わなきゃ。

【lackingKIA

えっと。いや、あの。りょこりょんが悪いんです。とりあえず、りょこりょんが】

理乃の反撃は、逆効果だった。火に油を注いだ。

なんで。嘘。違う。私はそんな意味で言ったんじゃない！ 理乃が、「のりの」がつぶやけばつぶやくほどに泥沼にはまった。沼の底から見えない手がたくさん「のりの」の足を引っ張って

いるような気分だった。

二回目もダイレクトメールで送ればよかったものを。それを公開でツイートするから後悔するのだ。夜中になっても次々と届くメッセージに理乃は怯えていた。ぴこりん、というメッセージ受信音はとっくの昔にならないように設定していた。鳴り止まなかったからである。

どうしよう。どうしたらいいの。

理乃は蒼くなって茫然と携帯の画面に流れるメッセージを見ていた。為す術がなかった。「のりの」のもとにきたメッセージには心ないものも含まれていた。たとえばそれこそ脈絡のないまったく知らない人から「お前が4ね」だとかそういう言葉が投げつけられた。

これに、理乃は傷ついた。

しかし、理乃だって似たようなことを「りょこりょん」に送ったのである。

たかがひとことのつぶやきがこんなに人を傷つけるなんて思ってもいなかった。たかが知らない人のつぶやきで自分がこれほど傷つくなんて考えてもいなかった。

結局その日は朝まで一睡もできず、目の下にくまを作って理乃は学校へ行く。

時間は良子が玄関を出たときに戻る。

何よまだ中学生なのにとっても生意気。ああ、バイトに遅れる。走らなければ。

良子は駅前のバイト先へと急いだ。部活が終わるのが十七時でバイトは十八時からである。そして今は十七時半。ぎりぎりのタイムスケジュールだった。しかし、必死こいて走ったため、ほんのひと時自由な時間があった。良子は携帯をとりだして、

【ryokoryoku

これからバイト。がんばる】

とつぶやいた。タイムラインを少しさかのぼると、なにやら不穏な空気が漂っていた。普段、「りょこりょん」のタイムラインはほのぼのとした雰囲気だけだ。それなのにどこかがおかしい。しかし、それが何なのか確認する前にシフトに入る時間が来てしまった。

良子は一日にたくさんつぶやく。理乃が読み切れないほどのつぶやきをしている。それでも良子はその自分のつぶやきが最低限、マナーやモラルを守っているものであるかどうかだけは確認して投稿ボタンを押していることを理乃はまだ知らない。

バイトが終わって良子は改めてタイムラインをさかのぼろうとした。しかしその必要はなかった。「りょこりょん」のフォロワーである「リアリス」ほか多数からリプライやダイレクトメールが飛んできていた。

【riarisudesu @ryokoryoku

りょこちゃん。大変！　なんか殺害予告みたいなのをされてるらしくて知らない人がすごく集まってらしいの】

## 炎上のツイッター（スピーカー）

---

良子の高校には情報社会という授業がある。理乃の中学校には情報の授業がある。どちらもパソコンから携帯、インターネット、動画サイトなどその他もろもろ情報に関することを取り扱う授業である。

良子の学校でも理乃の学校でも教師がたまに実際のニュースの切り抜きをコピーして配ったりする。良子が中学生だったころは、ホームページの掲示板やブログが炎上するということが記事になっていた。しかし、最近はツイッターが炎上することで記事になることがある。その日、配られたプリントには最近、ニュースになった炎上の事件と先生のコメントが書かれていた。

“なぜ人の気持ちがわからない。

なぜ人の気持ちを考えない。

なぜツイートするその一瞬前に、一秒でも躊躇して、これはどこかのだれかにとってすごく不愉快で屈辱で侮辱で侮蔑である可能性を考えない。

それができないから、炎上する。

「xxxされるのは女が悪い」であるとか「xxxみたいな嫁を連れてきた」であるとか「〇〇とxxがホテルで逢引してた」であるとか「△△と合コンした」であるとか「〇〇がこのホテルに泊まったからタオルのにおいを嗅いだ」であるとか。

たとえば渋谷スクランブル交差点や梅田ビッグマンの前などでスピーカーを持ってお前はその言葉を叫ぶことができるのか。できないだろう。でも、ネットで、公共の場でつぶやくということはそれと似たようなことでもあるんだ。

だから、みんなも気をつけましょうね (\*^\_^\*) “

この授業のとき、良子は眠っていた。プリントは読んでいなかった。情報の授業はわりと良子が知っていることばかりだったのでつまらなかった。鐘が鳴って配られたプリントを一瞥すると大体が良子の知っていることだった。なので、かばんの中にある「いらないプリント」ファイルに突っ込んでいた。

「リアリス」が教えてくれたことは本当だった。「56す」というひとことにたくさんの人が「のりの」に非難を浴びせていた。「りょこりょん」に届いていたメッセージはほとんどが同情と心配とアドバイスだった。

大丈夫？ 怖いわね。警察に相談した方が良いんじゃない。

良子は迷うことなく返事を書き始めた。

【ryokoryoku

大丈夫です。たぶん、ほんとにいたずらか何かだと思えます。悪意があって本当に行動を起こすとは思えません！ だから、これ以上事を大きくしないでください。お願いします】

しかし、良子のリプライ空しく、夜が更けるにつれて「のりの」への攻撃は激化していった。

寝不足でふらふらしながら理乃は学校から帰ってきた。学校では携帯を見なかった。怖くて見られなかった。部活は休んだ。母も姉もまだ帰っていなかった。

かばんを自分の部屋に置いて理乃は姉の部屋へ入った。特に目的があったわけではない。部屋に入って一歩目で何かを踏みつけた。とても散らかっている部屋だ。理乃は姉が無造作に床に転がっていたファイルを拾い上げる。クリアファイルの一番上にそのプリントは挟まれていた。「どうして人の気持ちを考えない」という文章が理乃の目に入った。まるで今の自分の状況と同じだった。ぽたぽたとプリントに涙がこぼれる。

私はお姉ちゃんの事を考えたの。お姉ちゃんの事を考えて、お姉ちゃんの将来の事も考えて、つぶやく回数を減らそうとしただけなの。全部、お姉ちゃんの為にしたことなのに。自分の責任を果たす為に私はっ。

気がついた。私は、お姉ちゃんの事を考えていた。でも、お姉ちゃんの気持ちなんてちっとも考えていなかった。ただ、責任とかそんな言葉に逃げていただけだった。

プリントは二枚あった。

“前回、炎上する側の過失について書きました。

炎上するとどうなるかを書いていませんでしたね。

世の中には正義感の強い人間がいるものです。炎上に際して直接、本人に文句や苦情、を言い、訂正を求める人はまだ良い人かもしれません。更生を期待しているのですから。

中には、こいつは「悪人」であるから、どんなことを言ってもいい。どんなことをしてもいい。どんな情報をばらまいてもいい。と思う人もいます。けれど、法律上は犯罪に近いのです。個人情報ばらまく場合は、その情報の出どころにもよりますがグレーゾーンです。

炎上を消火するためには、まず謝罪が必要だと思います。それだけで良いです。間違ってもIDを消して逃げる、なんてことはやめてください。ついっぷるに投稿した写真を消せなくなっちゃったりしますから。そのあとに何を言われてもとり合わないこと。感情的に反論してはいけません。それが一番だと思います。ただ謝罪の前にどうして炎上することになったか良く考えてみてください。そして謝罪の際には、自分の発言の何がいけなかったのかを反省している旨を書いておきましょう。

たまにツイッターは馬鹿発見機だという声を聞きますが、先生はそうは思いません。馬鹿はツイッターを使わなくとも自然に発見されるものです。結構身近にいます(´\_`;)“

理乃は震える手で携帯を操作した。  
一文字一文字ゆっくりと打ち込む。  
これで良いのか。大丈夫なのかな。  
逡巡して、躊躇して、振り切った。

【lackingKIA  
ごめんなさい】

【lackingKIA  
ごめんなさい。悪ふざけじゃなかったんです】

【lackingKIA  
ただ、私はりよこりよんさんの気持ちを考えていなかった。本当にごめんなさい】

## 正義のリツイート（拡散RT）

---

永遠とも思えるような時間が経った。良子はおそらくすでに見ているだろう。それでも応答がないのはなぜか。いや、良く見ると時計は五分も進んでいない。

と、そのとき画面が更新された。

リツイートが次々と表示される。理乃は画面をスクロールする。

【ryokoryoku

大丈夫です。私もおかしかったから】

【ryokoryoku

睡眠時間削って家族と話す時間も友達と話す時間も削ってしまったし】

【ryokoryoku

でも、私気がついちゃった。リーちゃんだよね】

なんでわかったの。

【ryokoryoku

こっちこそごめん。でも、私怒ってるの】

え？ やっぱり。もっと謝らなくちゃ。

そう思って理乃は立ち上がる。

制服のまま鍵を掴んだ。部屋を飛び出す。

自転車で風を切って走る。

涙が横に流れていく。

高校の中に走りこむ。

セーラー服と学ランの中、中学生のブレザー姿は浮いていた。けれど、そんなこと気にしなかった。演劇部の部室を探して、良子の姿を見つけた。

「ごっ、ごめんなさいっ」

ぼろぼろ涙をこぼしながら理乃は良子に謝った。しかし、涙でぼやけた視界に入ってきたのはクッキーをかじりながらごろごろする普段通りの姉の姿であった。理乃は我に返って部室を見渡したがちゃんと他の部員もいる。クッキーをかじっているのは同じだったが。

「ふへ？ え。何が？」

え。何が？ 何が？ 何が？ どういうことなの。理乃は混乱した。

「だ、だって今怒ってるってっ」

辛うじて言えた。

「ああー。いま、私が怒ってるのは、リーちゃんじゃないよ。だって、リーちゃんは素直に謝ったでしょ？ だからもう許した。私が怒ってるのは、リーちゃんにひどいこと言ったのに謝らない人たち」

「あの人たち今の謝罪にもケチをつけてた。それに怒ってんの。私は誰でも間違えることはあると思う。確かに殺すとかは簡単に人に言っちゃいけない。でも、それでその人のすべてが決まるわ

けじゃない。たかがつぶやきひとつでリーちゃんの何がわかるっていうの」

良子は珍しく姉らしく振舞っていた。周りに友達と後輩がいるからかもしれない。

「まあ、なうなうなう言いすぎてた私にも悪い所はあると思う。理乃」

「なに??」

「ありがとう」

あとは、私に任せなさい。

そう言って良子は理乃を家に帰した。

それから良子は非公式のリツイートで、「のりの」の謝罪を広めるために

【ryokoryoku

RT ちゃんと本人も反省しています。これ以上、責めないでください。@lackingKIAごめんなさい  
】

とつぶやいた。

## 希望のプロテクト

---

良子が部活を終えて家に帰ると、理乃が玄関で体育座りをして待っていた。みかん箱に捨てられている猫みたいな目をしてこちらを見た。

「ただいま」

「おかえりなさい」

理乃は待っていたくせに目をそらす。良子は理乃の隣にかばんを置くとすたすと台所の方へ向かって行った。

「ちょ、待ってよ。お姉ちゃん」

良子はくるりと踵を返すと、仁王立ちして理乃に言った。母親そっくりな仕草である。

「なあに？」

「えと。あの。どうなったの」

「どうって。理乃。見てないの」

「うん」

はあ、と良子はため息をついて、携帯を取り出して画面を見せた。「りよこりょん」のアカウントが表示されている。そこには普段通りのどうでもよい日常のほのぼのしたつぶやきがあった。続いて良子は「のりの」のアカウントを表示させた。そこにはまだ文句を言う人もあったが、それは少数で、「気にしない気にしない」や「反省しているならよし」などの味方となるメッセージもたくさんあった。殺伐としたコメントやメッセージはとうの昔に流れていってしまったようだ。

「よかったあ」

理乃はへたり込んでまた泣きだした。

「実はね。私も使い始めて一週間って経たないときに、似たようなことあって。でも、すぐに気がついて謝ったから、大丈夫だったの。それ話すとけばよかったなあ」

「そうだよ！ 教えといてよう」

「だって私より理乃の方が詳しいって思ってたんだもん。言わなくても知ってるかなって」

そこへ母がパートから帰って来た。泣いている理乃を見て目を白黒させていた。

「ただいまー！ ってどうしたの？」

かくかくしかじかだと二人は説明したのだが、母はほとんど理解できていないようだった。

それから父がツイッターで良子のアカウントをフォローしたり、良子が父のアカウントをブロックしたり、理乃がボットのようなつぶやきを直すにはどうすればいいのか悩んだり、猫が「めえー」と鳴いたり、偉そうなことを書いている情報の先生の過去には若気の至りがあったりするのだが、これはまた別の話。いつか別の機会に話すこととしよう。

拙作を読んでいただきありがとうございました。

少しでも面白いところがあれば幸いです。

ツイッターの炎上は少しでも気をつけていれば防げそうなのに、次々と燃え上がるので一回テーマにしてみたかったです。これを書いている一週間の間にも何件燃えていたことか。あのゆるキャラとか...

これから、番外編の短編をいくつか書いてゆきたいと思います。

表紙もフォトショップ練習がてら作っていきます。

よろしければぜひ読んでください(.\_.)

## 炎上のツイッター

<http://p.booklog.jp/book/32211>

著者：都 恵司

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/123miki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32211>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32211>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.